

ジャウイ文書研究会ニューズレター

第 5 号 2002 年 9 月 29 日

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

e-mail: midori-k@sophia.ac.jp

目 次

- I. 研究会予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.1
- II. 東南アジア島嶼部におけるインド系文字使用についての若干の私見
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 青山亨・・・ p.1

I. 研究会予定

9月29日(日) 上智大学

10月12日(土) 上智大学

11月9日(土) 上智大学

詳細は追ってご連絡いたします。これまで本研究会のご連絡を受け取っていない方で、今後、案内を希望される方は事務局にその旨、ご一報ください。

なお、12月1日(日曜)午前、岡山大学において、東南アジア史学会第68回研究大会の会員自由企画として、ジャウイ文書研究に関するセッションを開催します。こちらも詳細は、後日ご案内いたします。

II. 東南アジア島嶼部におけるインド系文字使用についての

若干の私見

青山 亨 (鹿児島大学)

東南アジアの現地語の文字使用の歴史を見ると、中国のベトナム北部支配を契機とする漢字の使用が始まった紀元前2世紀、インド文明の影響の中でインド系文字の使用が始まった第一千年紀の前半、イスラームの伝播にともなうアラビア文字の使用が始まった14世紀、そしてヨーロッパ勢力の進出によるローマ字がもたらされた16世紀という四つの画期を指摘することができる。このように系統の異なる文字が歴史

上の様々な段階で導入されたことが東南アジアの多様性を作り上げた要因の一つであろう。

それぞれの文字使用の歴史も一様ではなく、たとえばベトナムの場合は長らく漢文が公式の書写言語であり、現地語の文字表記が可能となったのは漢字を改造した字喃（チュノム）が工夫された13世紀頃からであり、さらに19世紀になるとローマ字を基にした国語字（クオク・グウ）が公式の文字となった。また、タイ系の人々の間ではタイ文字以外にもタム文字と呼ばれるインド系文字が広く使用されていたが、シャム王国が勃興するにつれてタイ文字に公用文字としての座を譲ったようにインド系文字の中でも盛衰があった。アラビア文字のように、島嶼部においてマレー語の表記に特化したジャウィ文字として広く普及しながら20世紀に入ってたちまちに衰退した例もある。

多くの変化を経たのち、20世紀中頃に東南アジアに国民国家が次々と形成される過程で、近代国家の公用文字として選ばれたのはインド系文字とローマ字であった。両者の分布には地域差が明瞭にあり、大陸部ではベトナムを除く諸国がインド系文字を公用文字としているのに対して、島嶼部ではローマ字が採用されている（ただし移民社会であるシンガポールの漢字とタミル文字は例外であるが）。比較的導入の新しいローマ字が多く个国家において公用文字となった背景には当然ながらヨーロッパ植民地支配の影響（プッシュ要因）が大きいが、それ以外の要素（プル要因）も考慮されなければならない。ここでは、島嶼部のインド系文字使用の歴史的变化の要因について若干の私見を述べてみたい。

島嶼部においても、歴史的に遡ると大陸部と同じくインドのブラーフミー文字（とくにその中でも南インドで発達した文字）に起源をもつインド系文字が書写文字として使用されていた。最初期のものとしては5世紀のサンスクリットの碑文が東部カリマンタンと西部ジャワで発見されており、やがてインド系文字の使用は歴史的な経緯の中でジャワ島、スマトラ島、バリ島、小スンダ列島、スラウェシ島、フィリピン群島に波及し使われるようになった。中でもスマトラ島のパレンバンを中心に栄えたシュリーヴィジャヤやジャワ島の中部および東部に栄えた歴代のジャワの王国では、それぞれの王国の公用語であるマレー語とジャワ語を表記する公用文字の地位を与えられ、とくにジャワ語の場合は碑文だけではなく膨大な文献が貝葉に書きとめられて後代に伝えられている。

しかしながら、強大なジャワの王国と言えどもジャワ島およびその周辺を超えて現代のインドネシアに相当する領域全体に実効的な支配を及ぼすだけの力を持つことはなかったし、その他の多くの地域では、たとえばヨーロッパ人到来以前のフィリピンのバランガイのように、首長社会を形成するに留まっていた。このような歴史的状況は、多島海という地理的条件によって規定されたものであり、中核的な王権の文化的影響が末端にまで波及し得た大陸部の地理的条件との差異を示すものだと理解できるであろう。言い方を変えれば、文字という「リソース」（資源）に関して「ストック」（蓄積・保存・再利用するものとしての書承テキスト）としての価値を見出した中央集権的な大陸部の国家に対して、点と点をつなぐネットワーク的社会を形成した島嶼部では「フロー」（一時的な記憶・交換を目的とした書承テキスト）としての役割が

重視されたと言いうことができるかもしれない（むろん、ジャワのように一つの領域をとればストックとしての文字資源が重視される場合もあったわけだが）。島嶼部の近代国家においてローマ字がインド系文字あるいはジャウィ文字に代わって公用文字に採用されえたことは、このような「フロー」としての文字資源という島嶼社会の特性からも理解されるべきであろう。

なお、ベトナム語には中国による支配以来「ストック」としての文字資源が存在していた。そのベトナム語がローマ字化した背景にはフランス植民地支配の影響と共に、中国の文化的影響からの自立という長期的な民族的課題があったことも考慮すべきであろう（中国の他の周辺国、朝鮮、日本でも程度の差こそあれ漢字から離脱する方向へ動いてきたことと比較されよう）。

島嶼部のインド系文字には資料からその歴史的発達が十分に迎えるジャワ文字（およびその近縁関係にあるバリ文字、スダ文字）のほかに、スマトラ島の諸文字、スラウェシ島のブギス文字、マカッサル文字、フィリピン群島の諸文字が存在する。後者の諸文字は、インド系文字がいったん土着化（localized）したのちさらに別の社会によって二次的に受容された文字と言ってよいかもしれない（たとえば、フィリピンの文字はスラウェシの文字の系統とされている）。先ほどの議論に即して言えば、多島海のネットワークの結節点に存在するサブ・リージョンごとに使用され、それ故に土着性が維持され続けた文字と言えるであろう。

東南アジアにおけるインド系文字の多様な変化については、受入れ先の社会の言語が元の言語と大きく異なることが理由としてしばしば指摘される。むろん言語ごとの特性にあわせた文字の変化は事実である。しかし、インド亜大陸においても多様な変化が起きていること、逆に、マレー語に特化したジャウィ文字が元になったアラビア文字と基本的に異なることからみて、言語的理由だけで多様性のすべてが説明されるとは思われない。文字資源「ストック型」の社会と「フロー型」社会ではそれぞれ異なった政策が取られたにせよ、それぞれの社会が文字に対して要求していた役割およびそれに対応した政策からも説明されるべきであろう。アラビア文字に関して言えば、アラビア文字が変化しにくかったのは、クルアーンという常に参照されるべき聖典の文字であることと無関係であるまい。それに対して、東南アジア島嶼部のインド系文字は基本的にインド本土の文献の読解とは無関係に利用されたことが土着化を推進したと考えられる（なお、大陸部ではパーリ仏典という参照されるべき聖典があったが、多くの場合、現地の文字に翻字された）。

『上智アジア学』20号では、このような問題意識を枠組みとして、東南アジア島嶼部を中心として、アラビア文字伝来以前の文字であるインド系文字の使用についての概観をおこなう予定である。

参考文献

河野六郎編. 2001. 『言語学大辞典別巻』三省堂

*** 第12回研究会記録は、次号に掲載いたします。（事務局）**

このニューズレターはジャウイ文書研究会の記録、および、ジャウイ文書研究に役立つ情報提供を目的としており、研究会出席者に会場で配布しています。研究会に出席できない方でこのニューズレターの入手を希望される方は、希望する号を明記し、あて先を記入し、160円切手を貼ったA-4サイズ返信用封筒を同封の上、お申し込みいただければ、郵送いたします。なお、研究工具や資料、文献の紹介、研究報告など、投稿を希望される方は、事務局にご連絡ください。

ジャウイ文書研究会ニューズレター 第5号

(2002年9月27日印刷)

2002年9月29日発行

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

電話：03-3238-3697 Fax：03-3238-3690

e-mail：midori-k@sophia.ac.jp